

## 会議録

会議名	平成 30 年度 第 1 回 山陽小野田市国民健康保険運営協議会
開催日時	平成 30 年 5 月 24 日 (木) 15 時 00 分～16 時 00 分
開催場所	市役所 3 階大会議室
出席委員	雨宮 宏枝 斉藤 邦子 酒井 和枝 峰永三枝子 岡野 洋三 加藤 政明 町田 正勝 平田 武 末富みどり 上田 浩之 辻村 征宏 (計 11 名)
欠席委員	民谷 正彰 藤村 嘉彦 藤原 哲 (計 3 名)
事務担当課 及び事務局出席者	福祉部 部長 岩本 良治 次長兼高齢福祉課長 兼本 裕子 国保年金課 次長兼課長 桶谷 一博 課長補佐 石橋 啓介 国保係長 石田由記子
会議次第	1 開会 2 出席委員数報告 (協議会資格審査報告) 3 事務局自己紹介 4 議事 ① 平成 30 年度国民健康保険料率について ② その他 5 閉会

### 議 事 内 容

	●議事①平成 30 年度国民健康保険料率について
事務局	<資料 1、2 を用い説明>
委員	県の試算額と市の試算額で被保険者数が違うのはなぜ。
事務局	見込みの被保険者数のため、県と市で多少のズレがあるもの。
委員	県に収める事業費納付金とはどういうものか。
事務局	医療機関等に支払う医療費を県が負担する代わりに、市が県に収める納付金である。

委員	基金の残高は、そんなにたくさんあるのか。
事務局	現在の残額は 9 億程度である。
委員	基金がどうなるか 1 年たってみないとわからないということか。
事務局	どうしても、予算とはズレが生じるので、決算時に判明することになる。
委員	支払う側からすれば、保険料は安い方がいいのだが、基金がなくなったら元も子もなくなるのではと思うが、その辺はどうか。
事務局	基金の保有額については、国の指針で「過去 3 年間における医療給付費の 5%以上」が望ましいというのがあるため、それを一つの目安としている。
委員	基金は、今後は減る一方になるのか。
事務局	事業費納付金の額が、予算計上時に確定しているため、県広域化前のように剰余金が多く発生して積み立てることは少なくなる。したがって、基金は徐々に減っていくものとする。
委員	保険料率を下げ、運営は大丈夫か。
事務局	基金を活用するので、運営は可能。
委員	保険料が一旦下がったが、その後またどんどん上がっていくということにはならないか。少し余裕を持って値下げした方が良くはないか。
事務局	基金の投入は、一応 1 億円を上限として保険料率を設定することと考えている。
委員	試算③と試算④の意図は。
事務局	試算④は、基金を最大限 1 億円を使って算定したもの、それに対し、最大限ではなく多少余裕を持たせて基金を 8,000 万円程度使ったものが試算③である。
委員	保険料が一旦下がったが、その後またどんどん上がっていくということにはならないか。

<p>事務局</p> <p>委員</p> <p>事務局</p>	<p>現在、国及び市が躍起になって医療費を下げようと努力している。それにより支出が減れば、保険料を上げずに済む。</p> <p>基金は、一旦取り崩しても、剰余金はまた積むことになるのか。</p> <p>剰余金が発生した時には、基金に積む。</p> <p>&lt;異議無く了承&gt;</p>
<p>事務局</p> <p>委員</p> <p>事務局</p>	<p>●議事②その他</p> <p>来年度以降の新たな保健事業として、人間ドック又は脳ドックの補助を考えている。</p> <p>胃がん検診を行わないのは、費用の関係か。</p> <p>国の指針が変更になったので、胃がん検診については50歳以上で2年に1回で良いということになった。費用的な面というよりも医学的な面が主な要因。</p>